

カナダの対日農産物輸出(1981年)

単位：1,000カナダドル(FOB)

生体動物	5,069	アルファルファ・デハイ	20,998
乳牛(純血種)	2,757	ビート・バルブ	1,933
その他の牛(純血種)	927	ふるいかすのペレット	13,310
ひなどり	1,351	油種子及び製品	459,157
食肉、食肉製品	207,036	亜麻仁	37,773
牛肉	14,019	からしなの種	2,813
豚肉	179,528	なたね	389,356
馬肉	11,107	大豆	16,966
内臓物	2,218	なたね油	11,374
乳製品	3,778	穀物及び製品	602,841
脱脂粉乳	694	大麦	191,577
乳製品副産物	2,840	玄ソバ	13,975
その他の加工食品	18,183	ライ麦	3,708
冷蔵野菜	4,479	小麦	354,442
乾燥野菜(主に豆)	6,342	モルト	37,155
メープルシロップ、砂糖シロップ	719	その他	
食用ゼラチン	731	原皮	5,323
アルコール性飲料	4,119	羽毛など	5,526
ウイスキー	4,000	牧草用種子	1,199
飼料	47,821	ビート・モス	2,849
ぶすま	9,305	牛脂	18,401

対日農産物輸出総額 1,386,587,000ドル

日本向け農産物輸出

穀物を中心に年間14億ドルの取引

カナダは、年間およそ十四億ドルにのぼる農産物を日本に輸出している。主なものは小麦と大麦、キャノーラ(食用油と飼料に使う)、亜麻仁(塗料・印刷インキ・リノリウムなどに用いる亜麻仁油や家畜飼料の原料)、それに豚肉であるが、ほかにも麦芽、からしなど輸出している産物が多い。また逆に日本からは、温州みかんなどいくつかの農産物を輸入している。

カナダの農産物輸出は、日本向けが全体の三分の一を占めているが、特に重要なのは穀物。日本はカナダ産小麦の三番目に大きい輸入国であり、大麦、ライ麦、麦芽では最大の市場となっている。(日本は、小麦の総輸入量の約三五パーセント、大麦の六〇パーセントをカナダから輸入している。)

麦芽でも、カナダの対日輸出量は約十万吨(昨年)と日本の全輸入量(五十万七千トン)のおよそ二二パーセントに及んでいる。そのほとんどは、ビール用のモルトである。カナダの穀物は品質の高さで知られており、それがカナダ小麦局や穀物業者、麦芽生産者にとって、日本に輸出する上で大きな利点になっている。またカナダが日本に初めて穀物

を輸出してからすでに八十年にもなっており(一九〇三年の小麦輸出額は二千六百七十七ドル、翌年は十四万ドル、一九二二年には三百二十二万ドルと急増している)、その間に築かれた企業や関係機関同士の強い信頼関係も、両国間の穀物貿易の発展に少なからず寄与している。

日加農産物貿易におけるなたねの位置も大きい。日本は、昨年、百五万八千トンのなたねを輸入したが、その九九パーセントはカナダ産であった。カナダのなたね産量は、日本の需要によって発展したといってもよい。

カナダはここ数年来、なたねを徐々に動物や人体に有害なエルシン酸およびグルコシノレート(のきわめて低い改良品種)のなかに加えており、八三年には日本向け輸出がすべて新種となる見通しである。キャノーラへの移行が進み、また日本の飼料業者がキャノーラの油かすを飼料に使うようになるにつれ、日本のキャノーラ市場はさらに拡大するものと、カナダでは期待している。

日本のそばの原料となる玄ソバも、カナダから大量に輸出されている。マニトバ州で生産される玄ソバは、大半が日本向けだ。日本人の好むそばの風味を持たせるように品種改良に努めており、今後ますます需要が増すものと思われる。

最近日本向け輸出が増えているのは豚肉。日本向け豚肉の出荷元は、以前はアルバート州だけであったが、最近はこの他にケベック州が加わった。カナダの豚肉は、品種改良と独特の格付け制度に

より、世界でも有数の品質を誇っている。ストレスが少ないので、肉のしまりもよい。豚肉輸出も、今後大いに期待できる。

このほか、カナダは牛・豚・家禽用の各種の飼料、タンパク質の含有量が多く、大豆の代用品として加工食品などに用いられるYFP(えんどう豆)、ウイスキーやワイン、はちみつ、メープル・シロップ、チーズ、チョコレートなども、日本に輸出している。さくらんぼも解禁になったので、来年から目見得するはずだ



日本向けに船積みされる小麦。

ある。カナダはまた、優秀な繁殖牛および種牛の輸出によって、日本の乳牛、肉牛の品種改良にも協力してきた。

日加間の農・畜産貿易は、日本にとってもカナダにとってもきわめて重要であり、これまでの信頼関係をもとに、今後一層の発展が期待される。カナダとしては、今後とも日本にとって、頼りになる供給国となるよう努力する考えである。